

「深切」と「親切」

母家の居間のガラス障子を通してモミジの木立が見える。その手前にある母の花壇が荒れている。母が癌で倒れてから充分な手を入れてもらえていないからだ。とはいえ、ミツマタはたくさん蕾をつけ、母が花壇の縁に植えたミヤコワスレも元気だ。

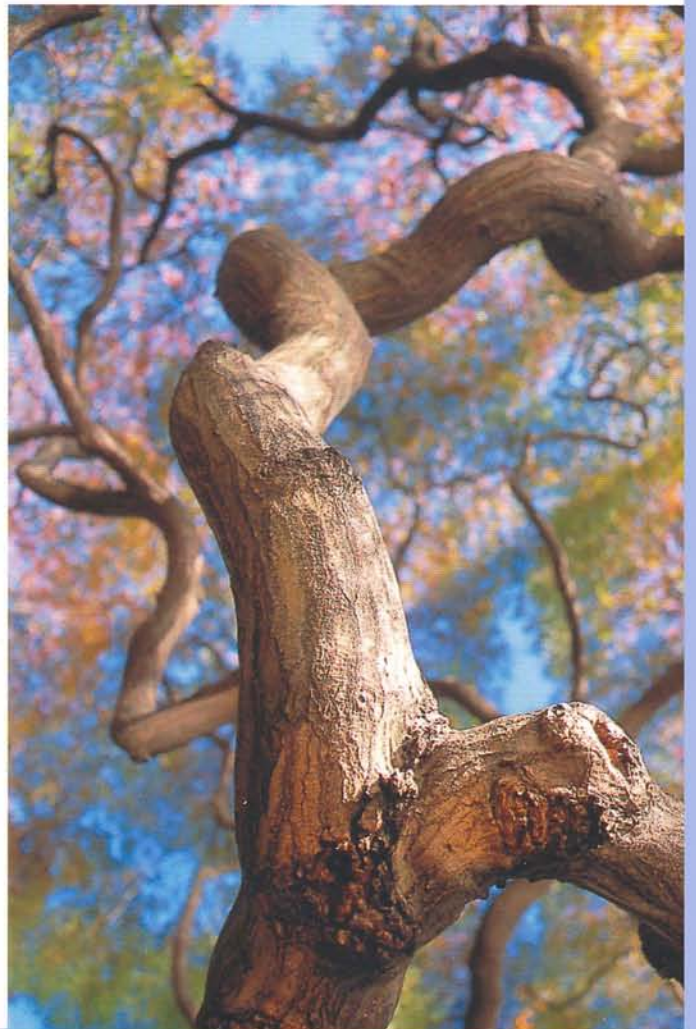
母は2年近く前の父の七回忌の日に腹痛を訴え、即日入院した。聞いてみると大腸の癌が予想以上に大きいことが分かった。医者は、取らなくても1年や2年は大丈夫だと言ったが、もつと長生きしてほしいと願った私は、母の同意を得て切り取ってもらった。

まもなく新緑の季節である。例年のように何本かの木は芽を吹かず、立ち枯れたことを知らせるだろう。特にモミジは忽然と枯れてしまう。日陰や虫害あるいは病気と理由はさまざまだ。ときには、私の無知や思い違いから枯らしたこともある。

かつて私は、モミジの剪定はとりわけ難しいものと思ひ込み、かえって木を傷めていた。特に太い枝を切り落とす時は、幹から数センチメートルも離れたところから切り取り、それが木にとっては優しい鋸の入れ方だと信じていた。逆だった。それでは幹の切り残した部分がじやまになり、切り口を樹肉でうまく覆えない。だから虚の原因となり、そこから雨水が入って木を腐らせたり病気にからせたりしてしまふ。

近年、私たちは樹木の手入れをはじめ、次

Photo • Mieko Yagi



々と生活の営みを外部化してきた。漬物さえ漬けない人がいる、擦り傷でも医者におせち料理はお惣菜屋にと頼り、生きる力をなくしてきた。わが家では、そうした生き方に物足りなさを感じて、失敗を恐れず、なるだけ自分たちのことは自分たちで考え、自ら手を下すようにしてきた。だからある時、樹木医の友人から枝の落とし方を教わったときは目が覚める思いがした。

その助言は、私が木にとって「しんせつ」だと思つて切つていた位置からすればはるかに深く切れ、というものだった。それが木にとっては本当の「しんせつ」だ、という。その後、きちんと樹肉が覆うようになった切り口を見るたびに、「深切」とはよくいったもの

だと感心するようになった。やがて、文字通りに親をも切る「親切」が時には求められることがあるのかもしれない、と考えるようになっていた。

だからだろうか、私は母への「親切」だと固く信じて、医者に「深切」を施すように依頼した。もちろん母はその後、生きる希望にあふれた一年余を過ごし、再発が分かった後最後の4カ月も自分の部屋で過ごすことを希望し、わたしたち夫婦の看病を受けながら自分の床で他界した。享年93歳だった。

これからも、母の花壇で白いミツマタや紫色のミヤコワスレが咲く頃になると、私は毎年「深切」「親切」と心の中でつぶやき続けることになりそうだ。

もり たかゆき ●ライフスタイルコンサルタント。大垣女子短期大学学長。伊藤忠商事などを経て現職。サラリーマンをしながら千坪余りの荒地を野菜や薪を自給する空間に変え、「アイトワ」と名付けて一般に開放。著書に「想い」を売る会社(日本経済新聞社)、「このままでいいんですか もうひとつの生き方を求めて」(平凡社)など。